

家庭における場面緘黙児のコミュニケーションの特徴

Communication Attitude of Children with Selective Mutism at Home

高 木 潤 野*

Junya TAKAGI

1. はじめに

場面緘黙とは、話す力を有しているにも関わらず、保育園・幼稚園や学校、職場などの特定の社会状況では話をする事ができない状態を指す。場面緘黙は話しことばだけの問題ではなく、表情や身ぶりといった非言語的なコミュニケーションが制限される場合もある。近年では、場面緘黙を不安障害の1つとする捉え方が共通認識となっている(Anstendig, 1999; Carbone et al., 2010; 角田, 2011; Manassis et al., 2007; Steinhausen et al., 2006; Viana et al., 2009等)。その一方で、場面緘黙には不安障害以外の要因も関わっていることが指摘されており(Yaganeh et al., 2003; Kristensen & Torgersen, 2001等)、個々の状態や緘黙状態発現の背景に応じた介入を検討することが不可欠となる。場面緘黙児への介入において必要な観点として坂野(1989)は、場面緘黙児本人へのアプローチ、家庭へのアプローチ、場面緘黙児をとりまく集団へのアプローチの3点を挙げている。しかし沢宮・田上(2003)は、従来多くのケースでは、家庭や学校、幼稚園などの集団への介入を欠き、場面緘黙児個人にのみ働きかけることが少なくなく、援助が十分に行われたとはいえないケースも多かったことを指摘している。場面緘黙児自身をとりまく家庭や学校等への様々な環境への介入にあたっては、まずそれぞれの状況における場面緘黙児の状態を的確に把握することが求められる。本研究では、これらのうち家庭に

における場面緘黙児の様子について検討を行う。

場面緘黙児は、学校等では話ができないものの「家では話している」「家族とは話をする」のように言われることが多い。1980年から1989年までの10年間における35事例の個別事例研究を検討した相馬(1991)の報告においても、全ての生活場面で話さない「全緘黙」の状態を示す例はきわめてまれであったという。近年のわが国の場面緘黙児を対象とした研究においても、状態像の記述として家庭での様子では「よく話す」「多弁」「普通に話ができる」などとされているものは多い(平田, 2002; 松村, 1998; 澤田ら, 2002; 山倉・佐藤, 2009など)。家庭で話すこと自体は、他の状況では話することができるのにもかかわらず特定の社会状況では一貫して話することができない、という場面緘黙の定義に従えば当然のことである。しかし、事例研究においても「家庭では、口数が少なく若干声が小さいものの、普通に話ができる」(沢宮・田上, 2003)、「母親と時々、普通の声の調子で話したりする。しかし、父親とは小さい声でしか話せない」(服部ら, 1998)「家で近所の人に出合っても喋ることはなかった」(西村, 2000)といった状態の場面緘黙児について報告したものも存在する。河井・河井(1994)は場面緘黙児が家で話すことについて、「学校ではしゃべらないが、家では普通に話すという場合の“普通”という判断は、学校における当人の完全な無口の状態との“比較のうえで”の話であって、必ずしも他児一般の言

*社会福祉学部講師

語行動と同じということを意味しない」と述べ、例外を除き「多くの緘黙児は家でも寡黙である」と指摘している。しかし話しているかどうかだけでなく、家庭内のどのような状況で話しているかや、家庭内においてどの程度話しているかという点に関しては、これまで定量的な検討は行われていない。10名の場面緘黙児を対象に従来の枠組みを用いて症状の分類方法について検討を行った筆者ら(臼井・高木, 2013)の先行研究では、場面緘黙児の特徴を記述するための重要な軸の一つとして「家庭内・外での対人的態度の差がある／家庭内では多弁である」かどうかという点を挙げた。家庭内における場面緘黙児のコミュニケーションの様子についてより詳細に検討を加えることで、場面緘黙の理解が促進されと考えられる。そこで本研究では、SMQ-R(かんもくネット, 2011)及び独自に作成した質問紙を用いて、場面緘黙児の家庭における話しことばによるコミュニケーションの状態を明らかにすることを目的とする。具体的には、1)「家庭内において話をする状況」、2)「家族の中で話をする相手」、3)「家族と話をする程度」、の3点について検討を行う。

SMQ-Rは、場面緘黙児の緘黙症状のうち、話しことばに関する部分を定量的に測定することのできる質問票である。Bergman et al. (2008)の作成したSMQ (Selective Mutism Questionnaire)をかんもくネット(2011)が日本語版として翻訳したもので、16項目の質問に答えることで場面緘黙の症状の程度を調べることができる。従来、場面緘黙の症状を測る標準的な尺度がなく、そのために発症率、状態像、治療の有効性等の研究にあたって、共通認識をつくるのが困難であったが(かんもくネット, 2011)、SMQ-Rにより場面緘黙の症状を定量的に測定することが可能となった。SMQ-Rは「A 幼稚園や学校」「B 家庭や家族」「C 社会的状況(学校の外)」の3つの状況における調査項目から構成されている。このうち「B 家庭や家族」については、「必要に応じて、よその人が家にも家族と話す」「必要に応じて、慣れない場所でも家族と話す」「必要に応じて、同居していない親戚の人(例えば、祖父母やいとこ)と話す」「必要に応じて、親や兄弟と電話で話す」「必要に応じて、家族でつき合いのあるよく知っている大人と話す」「必要に応じて、家で特定の友達と

遊ぶとき話す」という異なる相手・状況の6項目から成っている。このため、SMQ-Rを用いることで、家庭において話をする状況について検討することが可能になると考えた。また本研究ではSMQ-Rに加え、家庭での話しことばによるコミュニケーションの様子をより詳細に検討するために、独自に質問紙を作成した。これらの質問紙を用いて、家庭内において話をする状況、家族の中で話をする相手と程度について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

1) 対象

筆者らが行う場面緘黙児のための個別の相談又は小集団活動に参加している幼児・児童・生徒14名を対象とした。対象児の学年は、幼児2名、小学校低学年6名、小学校高学年4名、中学生2名であった。対象児の性別は女兒11名、男児3名であった。対象児はすべて学校や園では音声言語による十分なコミュニケーションを行うことが困難であることを主訴として筆者に相談歴のある者であり、筆者によって場面緘黙の症状を示すことが確認された。

2) 質問紙の構成

データの収集は質問紙調査によって行った。質問紙は、話をする「状況」についてはSMQ-R(かんもくネット, 2011)、話をする「相手」と「程度」については独自に作成した家庭での様子を把握する項目から構成した。

SMQ-RはかんもくネットのWebSiteに公開されているものを用いたが、合計得点を算出する欄については質問紙から削除した。これは、合計得点により場面緘黙の状態を数値化してしまうことに対して保護者に与える負の影響を懸念したことによる倫理的配慮からである。それ以外の質問文及び各質問項目についてはSMQ-Rと同一のものをを用いた。SMQ-Rの質問文及び質問項目はTable 1の通りである。またかんもくネット(2011)に従い、「⑫必要に応じて、家で特定の友達と遊ぶとき話す」はBergman(2008)のSMQ原文と内容が異なるため合計得点には含めないこととした。

独自に作成した質問紙は、1)「同居している家族」、2) そのそれぞれに対してどの程度話すか、

Table 1 SMQ-R の質問文と質問項目

質問文	「お子さんのこの2週間の行動についておうかがいします。次の各文について、どれが あてはまるかお答え下さい。 (0全くない・1まれにある・2よくある・3いつも)
A 幼稚園や学校	①必要に応じて、たいていの同級生と学校で話す
	②必要に応じて、特定の同級生(友達)と学校で話す
	③先生の問いに、声を出して答える
	④必要に応じて、先生に質問する
	⑤必要に応じて、たいていの先生や学校職員と話す
	⑥必要に応じて、グループの中やクラスの前で話す
B 家庭や家族	⑦必要に応じて、よその人が家にいても家族と話す
	⑧必要に応じて、慣れない場所でも家族と話す
	⑨必要に応じて、同居していない親戚の人(例えば、祖父母やいとこ)と話す
	⑩必要に応じて、親や兄弟と電話で話す
	⑪必要に応じて、家族でつき合いのあるよく知っている大人と話す
	⑫必要に応じて、家で特定の友達と遊ぶとき話す
C 社会的状況 (学校の外)	⑬必要に応じて、知らない子どもと話す
	⑭必要に応じて、家族の知り合いだが知らない大人と話す
	⑮必要に応じて、医者や歯医者で話す
	⑯必要に応じて、買い物や外食でお店の人と話す
	⑰必要に応じて、おけいごとや学校外のサークル活動で話す

の2点で構成した。はじめに「同居している家族」を全員書き出す欄を設け、次にそのそれぞれに対してどの程度話すかを評定する仕組みとした。どの程度話すかの評定については「とてもよく話す」「ある程度話す」「必要なことは話す」「ほとんど話さない」「全く話さない」の5件法で実施した。質問文は「ご家庭での様子についてお伺いします。ここ1年くらいの様子についてお答え下さい。同居している家族全員について、それぞれどの程度話すかを教えて下さい。」とした。

3) 手続き

質問紙調査は各対象児の保護者に対して実施した。201X年に行った場面緘黙児の保護者の集まりに参加した保護者に対して、研究の主旨を話した上で質問紙への記入を依頼した。質問紙は記入後、その場で回収した。質問紙の回収率は93.3%であった。なお記入の依頼にあたっては、

質問紙への記入は任意であり提出するのは研究への協力に同意した方のみでよい旨を伝えた。従って、質問紙の提出のあった保護者からはすべて研究への協力に関して同意が得られている。

3. 結果

1) 家庭内において話をする「状況」

Table 2はSMQ-Rの得点の平均、SD及び最小値

Table 2 SMQ-R の得点

	mean	SD	min-max
A 幼稚園や学校	4.4	3.32	0-9
B 家庭や家族	9.1	3.25	1-15
C 社会的状況	2.6	3.03	0-9
合 計	16.1	6.77	6-27

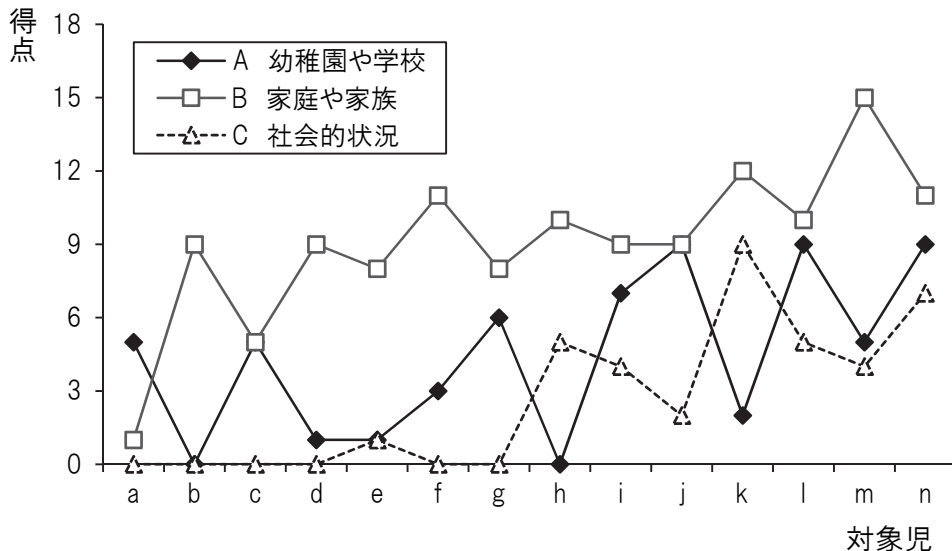


Fig. 1 A～Cの各得点の小計の対象児ごとの比較

と最大値を示したものである。平均は「A 幼稚園や学校」は4.4点、「B 家庭や家族」は9.1点、「C 社会的状況」は2.6点、合計では16.1点であった。AからCまでを比較すると、「B 家庭や家族」の得点が「A 幼稚園や学校」及び「C 社会的状況」よりも高い傾向がみられたことが分かる。

Fig. 1はA～Cの各得点の小計を対象児ごとに合計得点の低い者から並べて示したものである。縦軸は得点の小計、横軸は各対象児を示しており、aが最も合計得点の低い対象児である。この図から、b、d、e、fのように合計得点の低い対象児であっても「B 家庭や家族」については平均得点である9.1点に近いかそれ以上の者が存在したことが分かる。

Table 3はSMQ-Rの回答のうち、「B 家庭や家族」の内訳について示したものである。なお、「B 家庭や家族」には得点の計算からは除外するものが1項目あるが、この項目も含めた全6項目に対する回答について示してある。総回答数は、14名の対象児の各6項目の合計であるため、全84回答とな

る。この表から、「1 まれにある」が18件、「0 全くない」が13件みられたことが分かる。

SMQ-Rの「B 家庭や家族」の項目は「⑦よその人が家にいても家族と話す」「⑧慣れない場所でも家族と話す」「⑨同居していない親戚の人（例えば、祖父母やいとこ）と話す」「⑩親や兄弟と電話で話す」「⑪家族でつき合いのあるよく知っている大人と話す」及び得点に含めない「⑫家で特定の友達と遊ぶとき話す」の6項目で構成されている。Fig. 2は、これらを「家族が相手の項目」（⑦⑧⑩）及び「家族以外が相手の項目」（⑨⑪⑫）に分けて全対象児の回答数の合計を比較したものである。その結果、家族が相手の項目については「3 いつも」及び「2 よくある」の回答数が多い傾向がみられたことが分かる。一方家族以外が相手の項目については、「1 まれにある」「0 全くない」の回答が「3 いつも」「2 よくある」と同程度みられたことが分かる。

2) 話をする「相手」と「程度」

Table 4は対象児の同居している家族と話をする程度について、話す相手ごとに回答数を示したものである。祖父及び祖母については「祖父母」、兄弟姉妹についても同様に「兄弟姉妹」としてまとめて示してある。なお、構成する家族の人数は

Table 3 「B 家庭や家族」の回答の内訳

	3	2	1	0
	いつも	よくある	まれにある	全くない
回答数	28	25	18	13

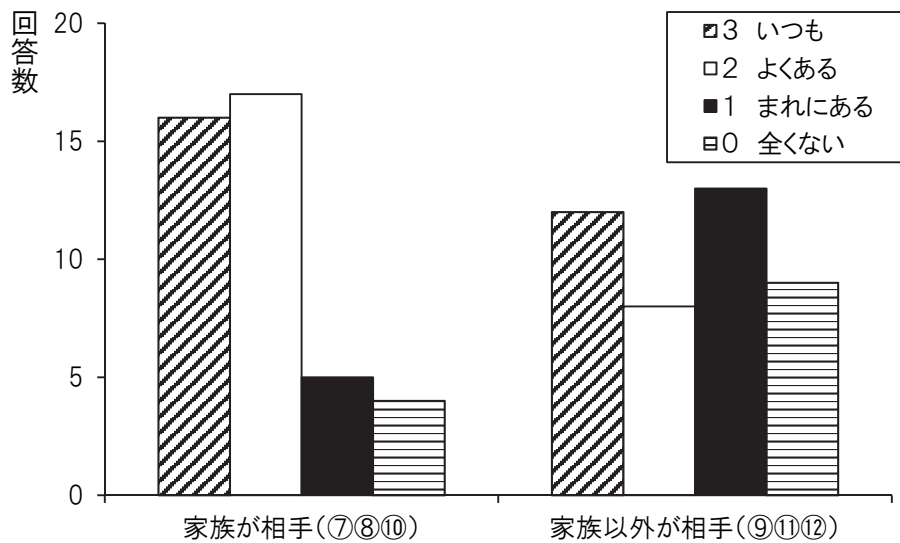


Fig. 2 「家族が相手の項目」と「家族以外が相手の項目」の回答数の比較

Table 4 同居している家族と話す程度

	5 とてもよく話す	4 ある程度話す	3 必要なことは話す	2 ほとんど話さない	1 全く話さない
母	12	2	0	0	0
父	11	2	0	0	0
祖父母	6	3	0	2	0
兄弟姉妹	17	1	0	0	0
計	46	8	0	2	0

対象児ごとに異なることから、各項目の合計は対象児の人数と等しくならない。この表から、同居している家族に対しては「5 とてもよく話す」が最も多い傾向がみられたことが分かる。特に「兄弟姉妹」に関しては、「4 ある程度話す」が1件あった以外は、すべて「5 とてもよく話す」であった。一方祖父母に対しては、「2 ほとんど話さない」もみられた。 χ^2 検定の結果、回答数の偏りは有意傾向であった ($\chi^2 (6) = 11.83, p < .10$)。

Fig. 3は回答のみられた「5 とてもよく話す」「4 ある程度話す」及び「2 ほとんど話さない」についての対象児ごとの回答数を、SMQ-Rの合計得点の低い者から並べて示したものである。縦軸は回答数、横軸は各対象児を示している。なお対象児を表す記号はFig.1と同一である。この図から、家族の相手によって話す程度が異なったのはa, c,

e, g, iの5名であったことが分かる。またbのように、SMQ-Rの合計得点は全体の中では低い方にあるにも関わらず7名の家族全員に対して「5 よく話す」の回答であった者も存在した。

4. 考察

本研究の結果、SMQ-Rの得点の平均は「A 幼稚園や学校」は4.4点、「B 家庭や家族」は9.1点、「C 社会的状況」は2.6点、合計では16.1点であった。かんもくネット (2011) は、3歳から11歳の場面緘黙児を対象に算出したBergman (2008) におけるSMQ17項目の得点について、SMQ-Rの16項目に修正した平均得点を算出している。それによるとSMQ-Rの得点の平均は「A 幼稚園や学校」は1.8点、「B 家庭や家族」は8.5点、「C 社会的状況」は1.7点、合計では12点であった。この得点

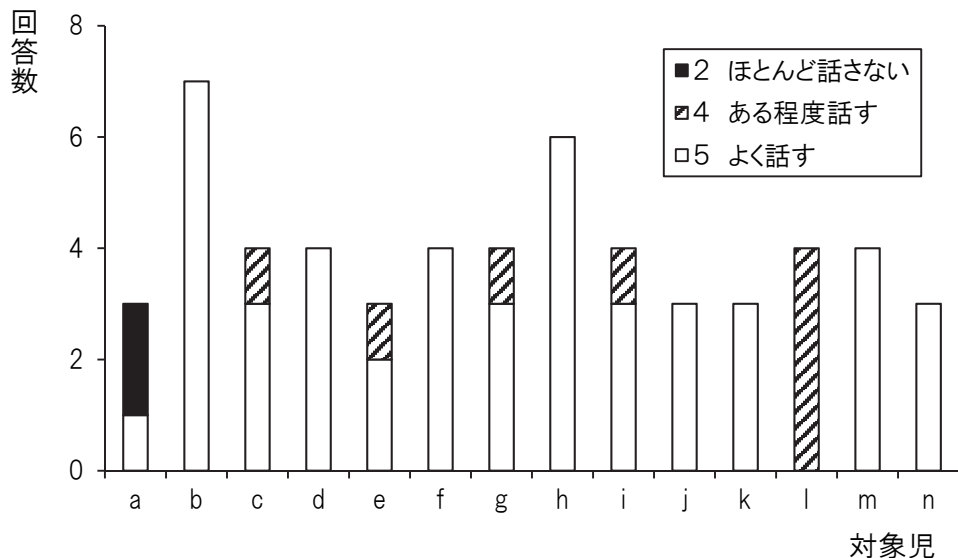


Fig. 3 話す相手ごとの話す程度

と比較すると、本研究の対象児の方が高い傾向がみられたことが分かる。学校の制度や文化的な違い等様々な条件が国により異なっているため海外の研究との比較は慎重に行う必要があるものの、本研究の対象児はBergman (2008) と比較して場面緘黙の程度が軽度な者が含まれていた可能性が考えられる。対象児ごとにみると、b、d、e、fのように合計得点の低い対象児であっても「B 家庭や家族」については平均得点である9.1点に近いかそれ以上の者が存在した。「B 家庭や家族」は得点を計算する項目は5項目であることから、9.1点という得点はだまかに考えて5項目中4～5項目に「2 よくある」がつく程度と捉えることができる。SMQ-Rの合計得点が低く場面緘黙の程度が比較的重度であっても、家族・家庭では場面緘黙の程度がより軽度な者と同程度に話をするることができる者は多い可能性が考えられる。

SMQ-Rの「B 家庭や家族」の内訳を検討したところ、「1 まれにある」が18件、「0 全くない」が13件みられた。そこで場面ごとの違いをさらに詳しく検討するため、「B 家庭や家族」のそれぞれの項目について「家族が相手の項目」(⑦⑧⑩)及び「家族以外が相手の項目」(⑨⑪⑫)に分けて全対象児の回答数の合計を比較した。その結果、家族が相手の項目については「3 いつも」及び「2

よくある」の回答数が多い傾向がみられた。ここに該当する項目は「⑦よその人が家にも家族と話す」「⑧慣れない場所でも家族と話す」「⑩親や兄弟と電話で話す」の3項目である。従って家族が相手であれば、「よその人が家にいる」「慣れない場所」「電話」というように状況が変わっても、場面緘黙児の多くは話することができることが推察される。一方家族以外が相手の項目については、「1 まれにある」「0 全くない」の回答が「3 いつも」「2 よくある」と同程度みられた。このことから、家庭の中であっても「同居していない親戚の人」「家族で付き合いのあるよく知っている大人」「特定の友達」といった家族以外の者に対しては、話せなくなる場合が多いと考えられる。

次に、家族と話をする「相手」と「程度」について検討を行った。同居している家族と話す程度についての聞きとりの結果では、同居している家族については「5 とてもよく話す」が最も多い傾向がみられた。評価に用いた5件法では「ある程度話す」「必要なことは話す」も設定されていたが、それぞれの回答数はそれぞれ8件及び0件であり、「5 とてもよく話す」の46件と比較すると少ない傾向がみられた。河井・河井(1994)は場面緘黙児の家庭での様子について、多くは家でも寡黙であると述べているが、本研究の結果から、場面緘

黙児は家族に対しては必要なことだけではなく「よく話している」という実態がある可能性が示された。

話す相手に関しては、「兄弟姉妹」については1件以外はすべて「5 とてもよく話す」であった。対象児ごとの比較においても、SMQ-Rの合計得点は低いにも関わらず7名の家族全員に対して「5 よく話す」との回答が得られた者も存在した。従って場面緘黙児の特徴として、同居している家族に対しては話す程度に差のない者が多い傾向があり、両親だけでなく兄弟姉妹に対してもよく話すことが明らかになった。ところで、「2 ほとんど話さない」という回答は祖父母に対して2件存在した。なおこの2件の回答は、SMQ-Rの合計得点が最も低い同一の対象児から得られたものであった。祖父母だけに限ってみると「2 ほとんど話さない」は11回答中の2回答、「5 とてもよく話す」は6回答であり、両親や兄弟と比較してよく話すという回答は少ない傾向がみられた。このため、「2 ほとんど話さない」という回答が祖父母に対して2件みられた要因は、対象児の緘黙症状の重さによるものである可能性と、相手が祖父母であることに関わっている可能性のいずれもが考えられる。祖父母であることが「2 ほとんど話さない」という回答が得られたことに関わっているとすれば、同居の形態等による接触する頻度の違い、年齢や生活の違い、祖父母側の健康やコミュニケーション上の問題、といった様々な理由が考えられる。同居している家族内においても話す程度に違いがみられることは場面緘黙児への介入方法を考える上でも重要な示唆が得られると考えられるが、本研究の結果からはこの点についてこれ以上の考察は困難である。従って、家族内における話す程度についてこのような違いがみられたことについては、今後の検討課題としたい。

本研究では、「家では話している」「家族とは話をする」のように語られることが多い場面緘黙児に対して、「家庭内において話をする状況」及び「家族と話をする程度」を明らかにすることを目的に、SMQ-R及び独自の質問紙を用いた検討を行った。その結果、1) 場面緘黙の程度が比較的重度であっても家族・家庭であればより軽度な者と同程度に話をすることができる、2) 家族が相手であれば「よその人が家にいる」「慣れない場所」「電

話」というように状況が変わっても話をすることができる、3) 同居している家族に対してはとてもよく話す、4) 同居している家族に対しては話す程度に差のない者が多い、5) 両親だけでなく兄弟姉妹に対してもよく話す、という点は場面緘黙児の多くに共通する可能性があることが示唆された。

最後に、本研究の臨床的意義と今後の課題について述べる。まず臨床的意義に関して、以下の点が指摘できる。家族・家庭であればよく話者が多いことから、場面緘黙児のアセスメントにおいては家庭での様子をよく把握することが不可欠であることが指摘できる。特に、SMQ-Rの得点が低く学校等での発話がほとんどない者であっても家族に対してはよく話している者がみられたことから、両者における場面緘黙児の示す状態は大きく異なっている点に改めて留意する必要があることが指摘できる。学校等と家庭とが連携をして実態把握を行い、情報を適切に共有し合うことが大切である。またその際に、家族の中で誰に対してどの程度話しているかも把握することで、効果的な支援に繋げられるのではないかと考えられる。本研究の結果では兄弟姉妹に対してよく話すという回答が多かったことから、介入の計画を立てるにあたって兄弟姉妹を話す相手とする方法が有効である可能性も考えられる。また、家庭の中で家族以外の人と話すよりも、家族を相手にして「よその人が家にいる」「慣れない場所」「電話」というような異なる状況で話をすることが可能である対象児が多くみられたことから、介入にあたってスモールステップで徐々に難易度を上げてゆく場合には、まず家族を相手にして状況を変えてゆくことが発話できる場面の拡大に繋がりやすい可能性が考えられる。

今後の課題としてはまず、本研究で用いた質問紙の妥当性が挙げられる。本研究では、どの程度話すかの評価については5件法で実施し、それぞれの基準は「とてもよく話す」「ある程度話す」「必要なことは話す」「ほとんど話さない」「全く話さない」とした。河井・河井(1994)は「家では普通にしゃべる」という親の評価の問題性に関して、家庭での生活がルーティン化されていることから、「親の意識の中で、子どもが客観的に判断される以上にしゃべっていると評価してしまう傾向がある」点を指摘している。従ってこの評価方法の妥当性

を確かめるために、保護者からの聞きとりではなく観察により発話量を測定するか、兄弟姉妹等の場面緘黙児ではない対照群を設定した比較が必要ではないかと考えられる。またSMQ-Rに関する課題として、同居している家族に対しては「とてもよく話す」と回答した者がほとんどであったにも関わらず、「B 家庭や家族」の得点の平均は9.1点であったという点が指摘できる。本研究の結果から、家庭においても家族が相手の場合と比較して、家族以外の者に対しては話せなくなる場合が多いことが明らかになった。SMQ-Rの「B 家庭や家族」には、家族だけでなく「同居していない親戚の人」のような家族以外の者を含む項目が、得点計算の対象である5項目中2項目含まれている。このため、SMQ-Rは家族との話しことばによるコミュニケーションを過小に評価してしまう可能性がある点に注意が必要である。また本研究の対象児に関する課題として、先に指摘した通り場面緘黙の程度が比較的軽度であった可能性がある点が挙げられる。本研究で得られた知見が、より場面緘黙の症状の重い者についても同様にみられるのかについては、今後対象児を増やして慎重に検討する必要があると思われる。

謝辞

本研究の一部は、平成25年度ユニバーサル財団助成金の助成を受けて実施した。

文献

- Anstendig, K. D. "Is Selective Mutism an Anxiety Disorder? Rethinking Its DSM-IV Classification" Journal of Anxiety Disorders, Vol. 13, No. 4, 1999, pp. 417-434.
- Bergman R. L., Keller M. L., Piacentini J., Bergman A. J. "The development and psychometric properties of the Selective Mutism Questionnaire" Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, Vol. 37, No. 2, 2008, pp. 456-464.
- Carbone, D., Schmidt, L. A., Cunningham, C. C., Mchholm, A. E., Edison, S., Pierre, J. S. and Boyle, M. H. "Behavioral and Socio-emotional Functioning in Children with Selective Mutism: A Comparison with Anxious and Typically Developing Children Across Multiple Informants" Journal of Abnormal Child Psychology, Vol. 38, 2010, pp. 1057-1067.
- 服部範子・森本馨・白井由香・黒田健次「緘黙児にみるコミュニケーションスキルの発達」『兵庫教育大学研究紀要 第3分冊』第18巻、1998年、53-60頁
- 平田幹夫「場面緘黙児の発話を促進するカウンセリング過程（Ⅰ）—小学校3年生男子の介入例—」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第9号、2002年、1-12頁
- 角田圭子「場面緘黙研究の概観 近年の概念と成因論」『心理臨床学研究』第28巻第6号、2011年、811-821頁
- かんもくネット「SMQ-R」
<http://kanmoku.org/news/News201110.html>
(2014年1月5日閲覧)、2011年
- 河井芳文・河井英子『場面緘黙児の心理と指導—担任と父母の協力のために—』田研出版、1994年
- Kristensen, H. and Torgersen, S. "MCMI- II Personality Traits and Symptom Traits in Parents of Children with Selective Mutism: A Case-Control Study" Journal of Abnormal Psychology, Vol. 110, No. 4, 2001, pp. 648-652.
- Manassis, K., Tannock, R., Garland, E. J., Minde, K., McInnes A. and Clark, S. "The Sounds of Silence: Language, Cognition, and Anxiety in Selective Mutism" American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, Vol. 46, No. 9, 2007, pp. 1187-1195.
- 松村茂治「クラスのなかの場面緘黙—緘黙児とクラスの子どもたちとのふれあい—」『東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第22集、1998年、75-91頁
- 西村優紀美「母子関係と子どもの病理」『学園の臨床研究』第1巻、2000年、44-51頁
- 坂野雄二『無気力・引っ込み思案・緘黙（情緒障害児双書）』黎明書房、1989年
- 澤田匡人・新川貴紀・市原学・外山美樹「選択性

- 緘黙を呈する6歳女兒の治療過程」『発達臨床心理学研究』第14巻、2002年、23-29頁
- 沢宮容子・田上不二夫「選択性緘黙児に対する援助としてフェイディング法に对人関係ゲームを加えることの意義」『カウンセリング研究』第36巻第4号、2003年、380-388頁
- 相馬壽明「選択性緘黙の理解と治療—わが国の10年間の個別事例研究を中心に—」『特殊教育学研究』第29巻第1号、1991年、53-59頁
- Steinhausen, H., Wachter, M., Laimbock, K. and Metzke, C. W. “A Long-term Outcome Study of Selective Mutism in Childhood” Journal of Child Psychology and Psychiatry, Vol. 47, No. 7, 2006, pp. 751-756.
- 臼井なずな・高木潤野「緘黙の類型化に関する研究—従来指摘されてきた2つの分類からの検討—」『長野大学紀要』第34巻第3号、2013年、1-9頁
- Viana, A. G., Beidel, D. C. and Babian, B. “Selective mutism: A review and integration of the last 15 years” Clinical Psychology Review, Vol. 29, 2009, pp. 57-67.
- 山倉辰裕・佐藤忠司「場面緘黙生徒への筆談による心理面接—「しりとり」から「箱庭」へ—」『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』第3巻、2009年、55-63頁
- Yeganeh, R., Beidel, D. C., Turner, S. M., Pina, A. A. and Silverman, W. K. “Clinical Distinctions Between Selective Mutism and Social Phobia: An Investigation of Childhood Psychopathology” American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, Vol. 42, No. 9, 2003, pp. 1069-1075.